

湯島聖堂漢文檢定

寺子屋編 漢詩

初級



41 春曉

孟浩然

春曉

孟浩然

春眠 曉を覚えず

春眠不覺曉

処処 啼鳥を聞く

処処聞啼鳥

夜来 風雨の声

夜来風雨声

花落つること 知る多少

花落知多少

詩の意味

春の夜明け

春の眠りは心地よく、夜が明けたことにも気づかない。あちらこちらから、鳥のさえずりが聞こえてくる。昨夜の風と雨で、咲いた花がどれほど散ってしまっただろう。

語句の解説

- 春曉…春の夜明け。
- 春眠…春の心地よい眠り。
- 処処…あちらこちらで。
- 啼鳥…鳥の鳴き声。
- 夜来…昨夜。
- 多少…どれくらい。ここでは疑問のことば。

作者の紹介(孟浩然)

中国、唐の時代の詩人(六八九〜七四〇)。都へ出て詩人の王維たちと交わりましたが、役人になれず、故郷に帰り自然の中で暮らしました。

42 絶句

杜甫

絶句

杜甫

江碧にして 鳥逾白く

江碧鳥逾白

山青くして 花然えんと欲す

山青花欲然

今春 看又過ぐ

今春看又過

何れの日か 是れ帰年ならん

何日は帰年

詩の意味

絶句

川の水は、濃い緑色に澄み、川面を飛ぶ鳥はますます白く、山の木々は緑に、花は今にも燃えるようにまっ赤に咲いている。今年の春も、みるみるうちに過ぎ去っていく。いつたい、いつになったら故郷に帰れる日がやって来るのだろうか。

語句の解説

- 絶句…詩の形式の名称をそのまま
- 逾…いよいよ、ますます。
- 然えんと欲す…今にも燃えるように赤い。
- 看…みるみるうちに。
- 帰年…故郷に帰る日。
- 江…川。ここでは、現在の四川
- 省成都市を流れる錦江のこと。
- 碧…濃い緑色。

作者の紹介(杜甫)

中国、唐の時代の詩人(七一二〜七七〇)。字は子美。役人として活躍しようとしましたが、思うようにならず、家族を連れて都を離れ、放浪の旅のうちに亡くなりました。優れた詩を数多く残したところから「詩聖(詩の聖人)」と呼ばれています。唐を代表する詩人で、李白と並んで「李杜」と呼ばれます。

43 江雪

柳宗元

江雪

柳宗元

千山 鳥飛ぶこと絶え

千山鳥飛絶

万径 人蹤滅す

万径人蹤滅

孤舟 蓑笠の翁

孤舟蓑笠翁

独り釣る 寒江の雪

独釣寒江雪

詩の意味

川の雪景色

山々に鳥の飛ぶすがたが見えなくなり、
すべての小道からも人の足あとが消えた。
ただ一その小舟に乗った蓑と笠をつけた老人が、
一人寒々とした雪の降る川で釣り糸をたれている。

語句の解説

- 江雪…川の雪景色。
- 孤舟…ただ一その小舟。
- 千山…多くの山。
- 蓑笠…雨具の蓑と笠のこと。
- 鳥飛ぶこと…鳥の飛ぶすがた。
- 翁…老人。おきな。
- 万径…すべての小道。
- 寒江…寒々とした冬の川。
- 人蹤…人の足あと。

作者の紹介(柳宗元)

中国、唐の時代の詩人(七七三〜八一九)。字は子厚。若くして役人となり活躍しましたが、政治の争いに敗れ、左遷されて不幸な日々を送りました。そうしたなかで、自然を詠んだ詩を多く残しました。

44 静夜思

李白

静夜思

李白

牀前 月光を看る

牀前看月光

疑うらくは是れ 地上の霜かと

疑是地上霜

頭を挙げて 山月を望み

挙頭望山月

頭を低れて 故郷を思う

低頭思故郷

詩の意味

静かな夜の思い

ふと目を覚ますとベッドの前に白い月の光が差し込んでるのが見えた。
それはまるで地上に降りた霜ではないかと思まちはがえるほどだ。
頭をあげて山の上の月を眺め、
うなだれて故郷のことを思う。

語句の解説

- 牀前…ベッドのあたり。
- 望む…眺める。
- 疑うらくは是れ…ではないか
- 頭を低れて…うなだれて頭をた
- と疑う。
- れる。物思いに沈むこと。

作者の紹介(李白)

中国、唐の時代の詩人(七〇一〜七六二)。字は太白。宮廷詩人として活躍したこともありましたが、放浪の旅の中で、多くの詩を作り、「詩仙(詩の仙人)」と呼ばれました。唐代の代表的な詩人で、杜甫と並んで「李杜」と呼ばれました。

45 秋風引 劉禹錫

秋風引

劉禹錫

何れの処よりか秋風至り

何処秋風至

蕭蕭として雁群を送る

蕭蕭送雁群

朝来庭樹に入るを

朝来入庭樹

孤客最も先んじて聞く

孤客最先聞

詩の意味

秋風の歌

どこからか秋風が吹いてきて、さびしい音をたてながら雁のむれを送ってきた。朝がたになり木々の間を吹きわたり、さわさわとたてる音を孤独な旅人である私(作者)はいち早く聞きつけた。

語句の解説

- 引：「うた(歌)」という意味。
- 何れの処より：「どこから」という意味。
- 蕭蕭：風の吹いてくるさびしげな音を表した言葉。「さわさわ」という音。
- 朝来：「朝に」という意味。
- 孤客：ひとり都をはなれ、地方の役所に勤める人。ここでは作者劉禹錫自身のこと。

作者の紹介(劉禹錫)

中国、唐の時代の詩人(七七二〜八四二)。字は夢得。若くして進士(役人を選ぶ試験)に合格しましたが、宮中での政治の争いに巻き込まれ、長く地方の役人として過ごしました。柳宗元や白居易とも詩人としての交流がありました。

46 江南の春 杜牧

江南春

杜牧

千里鶯啼いて 緑紅に映ず

千里鶯啼緑映紅

水村山郭 酒旗の風

水村山郭酒旗風

南朝四百八十寺

南朝四百八十寺

多少の楼台 煙雨の中

多少楼台煙雨中

詩の意味

江南地方の春景色

広々とつらなる平野の、あちこちから鶯の声が聞こえ、木々の緑が花の紅をいっそう引き立てている。水辺の村や山沿いの村の酒屋の旗が、春風になびいている。昔、都であったこの地には南朝以来の寺院がたくさん建ち並び、多くの楼台が、春雨の中に煙っている。

語句の解説

- 江南：長江下流の地方
- 鶯：コウライウグイス。日本のウグイスよりも大きくて黄色い。
- 水村：水辺の村。
- 山郭：山里。郭は村と同じ。
- 酒旗：酒屋の目印の旗。
- 南朝：現在の南京市に都をおいた王朝。
- 四百八十寺：多くの寺。
- 多少の：多くの。
- 楼台：堂や塔のような高い建物。
- 煙雨：煙るような春雨のこと。

作者の紹介(杜牧)

中国、唐の時代の詩人(八〇三〜八五三)。字は牧之。若くして進士(役人を選ぶ試験)に合格して役人となりました。七言絶句に優れていました。

47 富士山

石川丈山

富士山

石川丈山

仙客来たり遊ぶ

雲外の巔

仙客来遊雲外巔

神竜棲み老ゆ

洞中の淵

神竜棲老洞中淵

雪は紈素のごとく

煙は柄のごとし

雪如紈素煙如柄

白扇倒に懸かる

東海の天

白扇倒懸東海天

詩の意味

富士山

仙人が雲の上にそびえる富士の頂に舞い降りて遊び、
神竜がほら穴の淵に住んで年老いている。
富士山に積もっている雪は、白い練絹のようであり、立ちのぼる煙はあ
たかも扇の柄のように見える。
それはまるで、白い扇子をさかさまに、東海の空にかけたようだ。

語句の解説

○ 富士山…静岡・山梨両県にま

深く水をたたえたところ。
煙は柄のごとし…富士山の頂
上から立ち上る煙は、扇子の柄

○ たがる、日本一高い山。

○ 仙客…仙人。

○ 雲外の巔…雲の上にそびえる頂上。

○ 神竜…不思議な力を持った竜。

○ 棲み老ゆ…長く住みついて老いる。

○ 洞中の淵…ほら穴の中にある、

○ 作者の紹介(石川丈山)
江戸時代の詩人(一五八三〜一六七二)。名は凹、字は丈山。三河(現在

の愛知県東部)の人。徳川家の家臣でしたが、後に京都で詩仙堂を築き、
隠居暮らしをしました。

湯島聖堂漢文検定 テキスト

寺子屋編 漢詩 初級

編集 湯島聖堂漢文検定編集委員会

発行日 令和六年六月一日 初版発行

刊行 湯島聖堂漢文検定編集委員会

東京都文京区湯島一の四の二五 湯島聖堂構内

制作 朔工房

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は禁じます